子育て支援の現状と課題Ⅲ

～神戸親和女子大学子育て支援センターの５年間の実践から～

Study of current situations and issues of Childrearing Support. Ⅲ

～Through the five-year practice of the Center for Childrearing Support center at Kobe-Shinwa women's university～

森　本　玲　子*
石　岡　由　紀**
山　口　香　織**

はじめに

本学の子育て支援センター『すくすく』（以下，本センター）が設立され，2013年１月で５周年を迎える。来場者は，述べ30,000人を超え，月500名ほどの親子が本センターを利用している状況である。

本センターのプログラム内容に関しては，前稿において述べたとおり，３つのプログラム（デイリープログラム・ウィークリープログラム・スペシャルプログラム）で成りたっている。

ここでの学生の存在は欠かせず，これまでで述べ4,000人超の学生がボランティアにきている。ウィークリープログラムはもちろんのこと，開設２年目には，学生の声から生まれた「すくすく絵本ライブラリー」が始まった。この活動は，月２回の開催で今でも受け継がれている。また，本センターの花壇の植替えなども彼女たちが行っており，学生ボランティアの活躍によるところが大きいのも，本センター運営における特長の一つである。利用者と共に歩んできた本センターは，今やたくさんの方（学生・教職員・地域の方々）に，支えられながら運営していることを実感している。

また，本センターを利用している保護者は，母親が大半である。本稿では，母親のライフステージについても注目していく。原田（2006）は，母親のライフステージの変化と課題について次のように述べている。女性の高学歴化に伴って，職業をもつ女性が増え，そのため晩婚化が進み，第一子出産年齢も同時に高くなり，出生数が減った。そして，長子出産から末子就学までの「子育て時期」が短くなる一方で，戦前から寿命は伸びている。これは，子育て終了後

* 本学職員
** 発達教育学部　児童教育学科

の母親自身の人生が伸びたことを意味し，子育てという人生の目標がなくなった後に残された自分の人生に展望が持てないことが，現代の子育てを苦しくしている。原田が言う母親の人生への展望について，今手助けが必要となっているのではないだろうか。

本稿は，5年間の本センターのあゆみを振り返るとともに，利用状況，利用者に回答を得たアンケート調査の結果を報告する。その上で，子育て親子のニーズを捉え，母親のライフステージへのアプローチ，今後の子育て支援について検討していくことにする。

1．子育て支援センター『すくすく』の利用状況

対　象：2008年1月～2012年11月までの利用者

内　容：①利用者数②子どもの年齢別利用者数③子育て相談件数④子育て相談の内容⑤学生ボランティア数⑥スペシャルプログラム内容と実施件数

結　果：①利用者数は，子ども16,501人，その保護者13,632人であった（図1）。1ヵ月の平均利用者数は，約510人であった。

②子どもの年齢別利用者数は，0歳3,293人，1歳5,812人，2歳4,582人，3歳2,038人，4歳474人，5歳以上302人であった（図2）。また，各年度における年齢別の利用数の推移は，いずれの年度も1，2歳の利用が多く，0歳は増加傾向であった（図3）。

③子育て相談件数は，5年間を通して957件あり，1ヵ月の平均相談数は，約16件であった（図4）。

④子育て相談の内容として5年間を通して最も多かったものは，「しつけ・育児方法」に関する405件であり，次に「基本的生活習慣」に関する相談が223件，次いで「発育・発達」に関する相談が155件であった（図5）。

⑤学生ボランティアは，5年間で4,412人が参加していた（図6）。

⑥スペシャルプログラムは，5年間を通して123プログラム実施した。プログラム内容と実施件数は，表1に示した通りである。

考　察：

本センターは開設から5年目を迎え，利用者の数は30,000人を超えた。その内訳は，子どもが16,501人，その保護者が13,632人である。これまでで利用者が最も多い年度は，2008年度の6,822人であった。これは，開設年にあたり本センターが新聞やメディアに多数取りあげられたことが考えられる。一方，最も少なかった年度は2009年度であった。この年には，新型インフルエンザが大流行し，本センターも約2週間の閉館をよぎなくされたという経緯があるが，事態が沈静化するまでの間，乳幼児のいる家族が外出を控えたことによる影響が大きいものと考えられる。それ以降は，毎年6,000人を超える利用があり絶えずその数を維持している。5年を経て，本センターが地域の子育て支援施設として認知され定着してきていることが推察される。

1日当たりの利用者数は，平均25.5人である。この数は本センターの規模からすると妥当な

数であり，これ以上になるとゆったりとした雰囲気での利用が難しくなる。また，午前と午後で利用者がほとんど入れ替わることから，2時間以内の利用が多いのではないかと思われる。

次に，利用する子どもの年齢については，1歳が最も多く，2歳，0歳と続く。この現状は，他大学における利用状況とも一致しており（大林ら，2011），全国的にみても3歳未満を対象とした子育て支援ニーズの高さがうかがえる。取り分け1歳の利用が多いことについては，発達的特徴が考えられる。1歳はいろいろな物に興味を持ち始め，自立歩行や他者との簡単な言葉のやりとりが可能になる時期である。外界への関心も増すので，母親を安全基地としながら，子どもは新奇なものとのかかわりを積極的に行おうとする。公園デビューもちょうどこの頃の子どもが多い。いろいろなことができるようになると，保護者にとっても子どもにとっても，家での遊びは退屈で窮屈に感じてくるのかもしれない。場所を変えるだけで，子どもの遊びに変化がみられることも多く，母親自身のリフレッシュに繋がることが期待される。また，最近の利用状況から，0歳の子どもを持つ親子が増加傾向にある。以前であれば，首がしっかりと据わり，寝返りができ始める5，6か月以降の子どもをもつ親子の利用がよくみられていたが，近ごろは，首が据らない2，3か月の子どもを連れた親子の利用も多い。大半は，兄弟姉妹も一緒の利用が多いが，0歳前半の親子が安心して集まれる場として認知されていることがわかる。一方で，この年齢の子どもたちが安心して遊ぶことのできる場所不足が示唆される。常に養護を必要とし，衛生面や安全面の配慮が欠かせないこの時期の子どもを持つ保護者にとって，子どもを自宅外に連れていくことは難しい。また，受け入れる施設の数も限られている現状では，子どもをどこにも連れていくことができず，いつも自宅で子どもと2人きりで過ごす保護者も少なくない。常駐の保育士の聞き取りによると，ある保護者は「毎日2人きりで家でいるとつらい」「家の外に出れば楽になる」と言う。このことからも，地域に子どもと気軽に出かけられる施設があることの社会的意義は大きいと言える。本センターにおいては，このような状況を踏まえ，今後は利用者のニーズを把握し，0歳の親子を対象とした活動も検討したい。

子育て相談件数は，1ヵ月平均で約16件であった。1ヵ月の平均利用者数が500人であることを考えると決して多くはない。保護者が何気ない会話の中で発する子育ての不安や疑問を，常駐する保育士や教員がその都度，適切なアドバイスをしており，普段の活動の中で十分なかかわりと相談業務ができていることがわかる。また，本学には，心理相談室がある。これまでは，保護者からの相談を心理相談室に繋ぐことはなかったが，心理相談室が行っている無料相談会の案内チラシは本センターに掲示している状況である。

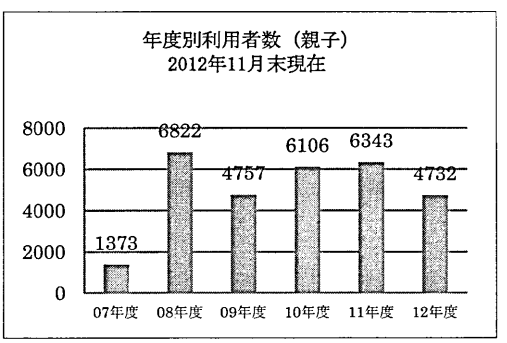
次に，子育て相談の内容を年度別にみていく。5年間を通して，常に上位にあがっている2項目に「しつけ・育児方法」と「基本的生活習慣」がある。「しつけ・育児方法」の内容には，「子どもが言うことを聞かなくて困っている」や「子どもを眠らせる良い方法はないか」など，ひと昔前であれば親や近隣の人に聞いていたような子どもの性格や行動についての相談が目立つ。また，「基本的生活習慣」も同様で，トイレットトレーニングの方法や離乳食の相談などが

ほとんどであった。

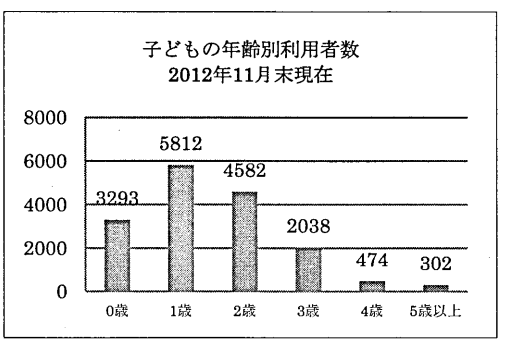
この2項目について5年間の推移をみると，相互に連動して増減していることがわかる。その特徴として，2008年度と2011年度を頂点にM字型のグラフになっている。また，それぞれの年度で子どもの年齢別利用状況をみると，2008年度と2011年度は1歳の利用が多い。現時点では相談対象児の年齢に関する把握ができておらず断定はできないが，これらの項目は1歳前後の子どもに関する相談が多いのではないかと思われる。子育てをする母親にとっては，子どもが1歳になる頃にある種の子育て困難期がやってくるのかもしれない。この点は，これからの縦断的な調査や細やかな分析によって明らかにしたい。

また，2008年度から徐々に増えている項目として「発育・発達」と「その他」がある。具体的な相談内容をみてみると，「発育・発達」は，健康診断等で指摘があった言葉の発達の遅れが多い。自分の子どもが他児と比べて遅れているとの指摘は，子どもを持つ親であれば誰しも一番の心配ごとであろう。また，その件数が年々増加していることは，近年の「ちょっと気になる子」に対する社会の過敏な反応とも関係があるのではないかと思われる。「その他」では，夫婦関係や舅姑問題，復職への意欲などがあげられていた。これは，母親を取り巻く環境に対する問題といえ，これからは保護者自身に対するサポートがさらに必要になってくると考える。今後の課題として，どの年齢の子どもを持つ保護者がどのような悩みを持っているか，相談の傾向とその主な要因の特定など，さらに詳しくデータ分析する必要がある。

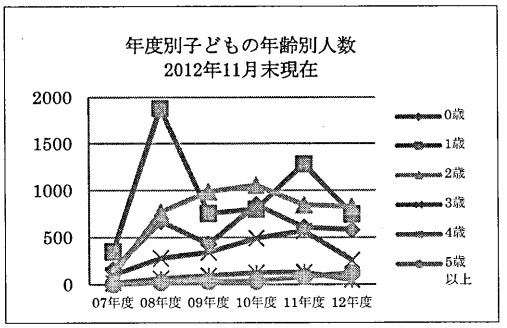
スペシャルプログラムとは不定期に行われる活動で，保護者からのニーズも取り入れながら多種多様な内容を行っている。例えば，すくすく絵本ライブラリー，すくすくワーキングなどである。すくすくワーキングでは，食育の視点から地産地消に着目し，2011年から地元のらっきょうを使った「らっきょう漬け」や大豆を使った「味噌作り」を行っている。これらは地域のNPO法人の方を講師として迎え，昔から受け継がれている家庭の味や技法を学びながら，異世代が交流する場となっている。保護者にとって親世代の人々とかかわる機会はとても新鮮なようで，いつも和やかな雰囲気の中，大盛況で終わる。今後も保護者や子どもと直接向き合い，耳を傾けながら，よりよいプログラムを構成していきたいと思う。



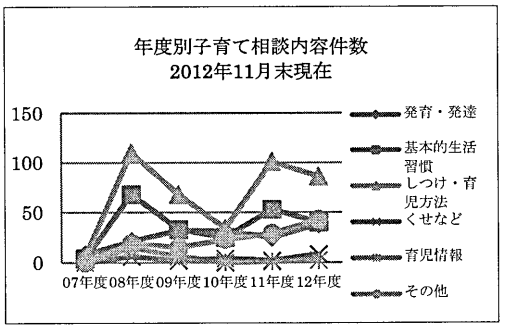
（図1）年度別利用者の推移



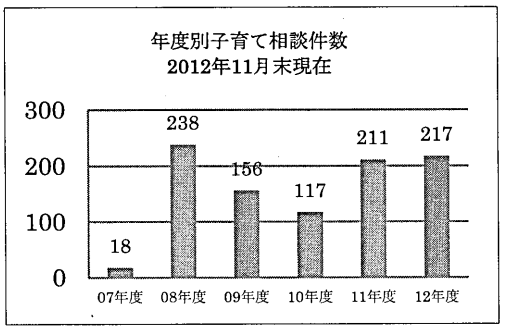
（図2）子どもの年齢別利用者の推移



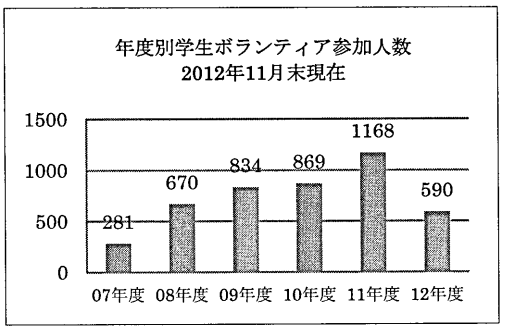
（図３）年度別子どもの年齢別人数の推移



（図４）年度別子育て相談件数の推移



（図５）年度別子育て相談内容件数の推移



（図６）年度別学生ボランティア参加人数の推移

表１　スペシャルプログラム内容と実施内容（2008年～2012年11月末）

	07年度	08年度	09年度	10年度	11年度	12年度	合計
保健師講習会	1	4	4	4	3	3	19
すくすく絵本ライブラリー	0	0	3	19	23	16	61
わくわくクッキング	0	3	3	3	3	2	14
わくわくパパクッキング	0	0	1	1	1	1	4
すくすくワーキング	0	2	3	1	5	2	13
すくすく DE パパとあそぼう	0	0	1	1	1	1	4
親子でからだを動かそう！	0	0	0	0	0	1	1
すくすく DE おいもほり	0	1	1	1	1	1	5
おいもほり遠足	0	0	1	0	1	0	2
合　計	1	10	17	30	38	27	123

２．デイリープログラム利用者によるアンケート調査

対　象：2012年７月から８月のデイリープログログラムに参加した保護者（60名）

方　法：質問紙法

質問内容：①保護者の性別②保護者の年齢③子どもの年齢④本センターを知った情報源⑤本センターを利用する理由⑥満足度⑦利用頻度⑧他の利用施設⑨要望および意見

結　果：

①アンケートに答えた保護者は全員女性であった。

②保護者の年齢で最も多かったのは30歳～34歳（42%）であった。次に35歳（30%），次いで41歳以上（15%）であった（図７）。

③子どもの年齢では，１歳（30%）が最も多く，次に０歳と２歳（25%），次いで３歳（10%）であった（図８）。

④本センターを知った情報源は，最も多かったのは知人（65%）であった。次にインターネット（14%），次いで広告，チラシ（７%）であった（図９）。

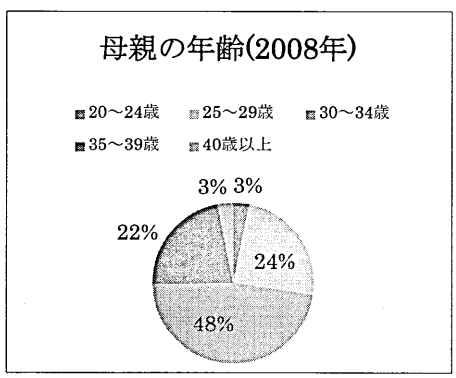
⑤本センターを利用する理由は，子どもが遊べる場所がほしかった（38%）が最も多く，次に他の保護者と情報交換をしたかった，場所が家から近かった（17%）。次いで子どもの遊び相手が欲しかった（14%）であった（図10）。

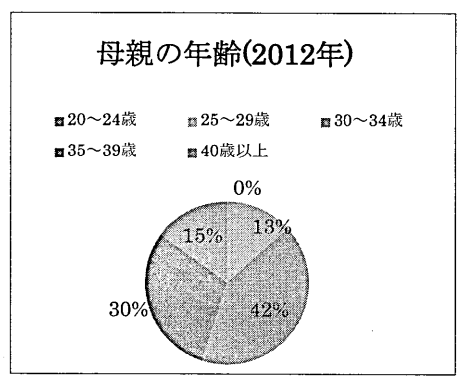
⑥本センターを利用した満足度は，とても満足である（75%）が大半であり，ついで満足である（22%）と，95%以上が満足している結果であった。2008年の調査では，とても満足である（71%），満足である（29%）という結果であった。

⑦本センターの利用頻度として最も多かったのは月に１～２回（50%）であった。次に週に１回（30%），次いで週に２～３回（20%）であった（図11）。

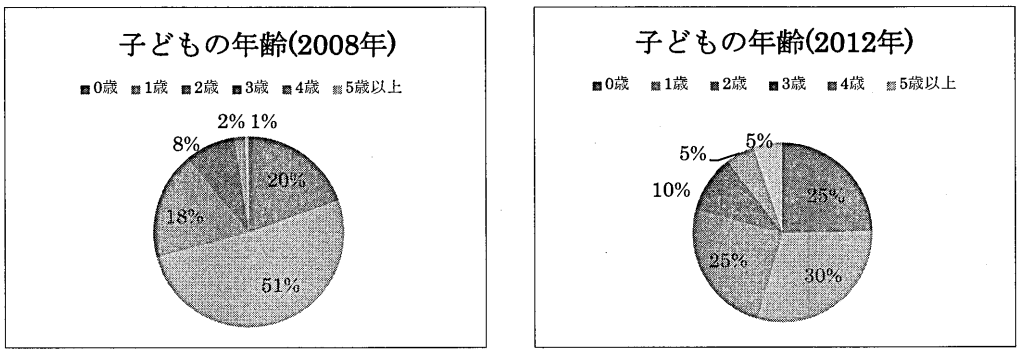
⑧他に利用している施設は，最も多かったのが児童館（51%）で，次に保育所・幼稚園（18%），次いで地域福祉センター（12%）であった（図12）。

⑨本センターへの要望や意見については，2008年の調査では，要望や意見が33件であったのに対し，2012年には，14件と減少していた。

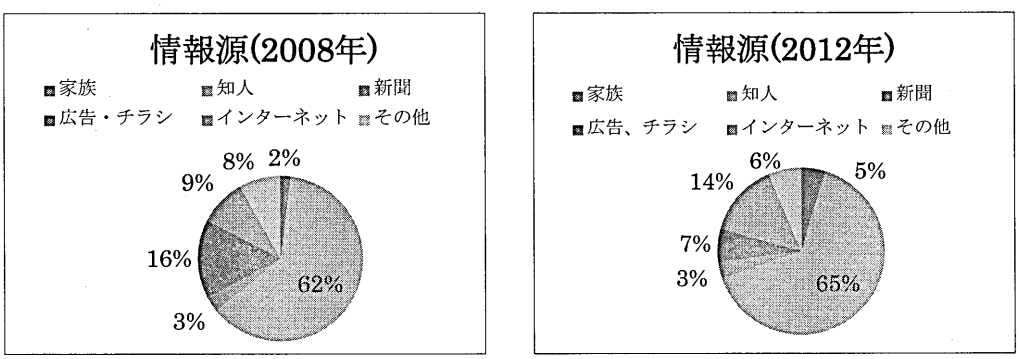




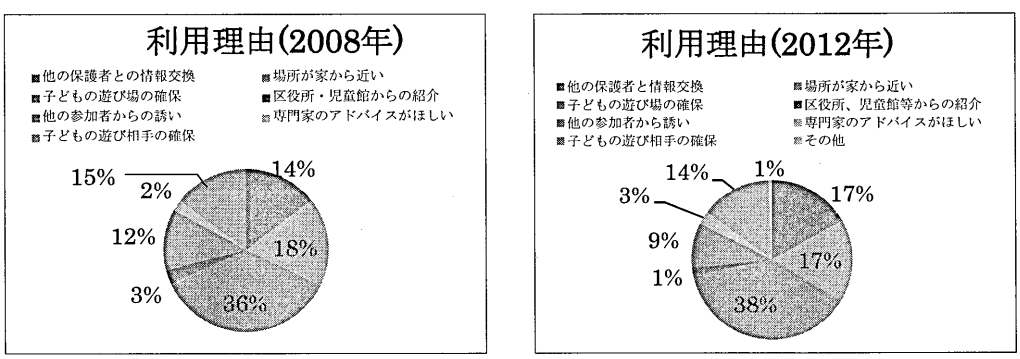
（図７）母親の年齢の推移（2008年・2012年）



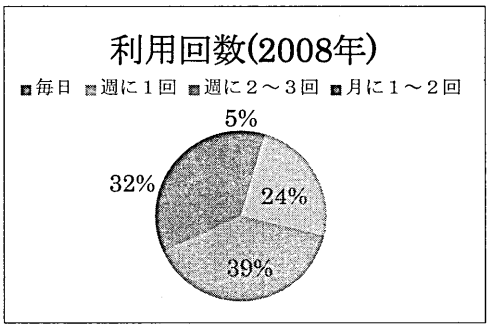
（図８）子どもの年齢の推移（2008年・2012年）

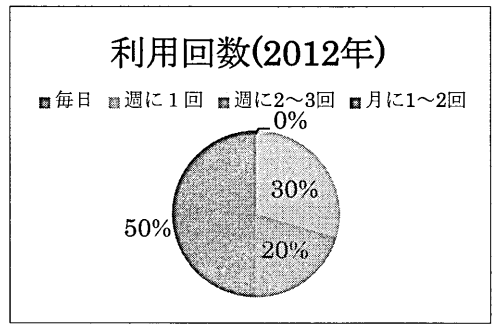


（図９）情報源の推移（2008年・2012年）

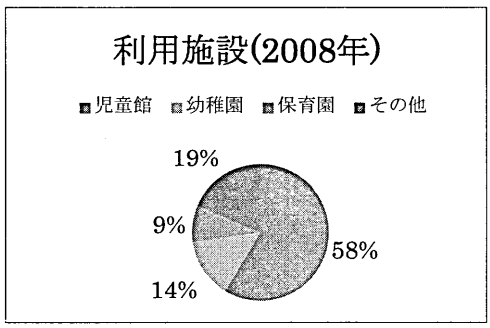


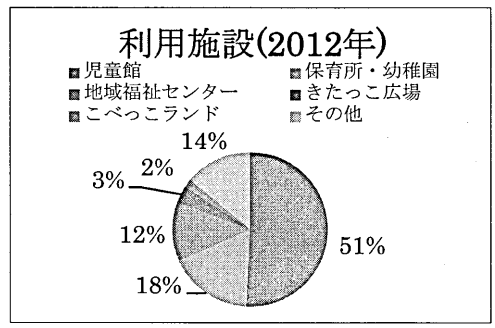
（図10）利用理由の推移（2008年・2012年）





（図11）利用回数の推移（2008年・2012年）





（図12）利用施設の推移（2008年・2012年）

考　察：

2012年に調査したアンケート結果と本センター開設初年2008年に調査した結果と照らし合わせ，変化や利用者のニーズ等をみていく。

回答者の年齢は，2008年，2012年ともに30～34歳が約半数を占めていることがわかる。また，35歳以上の保護者は，2008年では全体の25％であったが，2012年では45％となり，増加していることが明らかとなった。回答者の子どもの年齢をみると０～２歳が80％と最も多い。つまり，本センター利用者における35歳以上で出産する母親の割合の多さが示唆される結果となった。一方，本センターの利用状況をみると，第１子のみの保護者だけでなく，第２子，第３子を持つ保護者も本センターを利用している。晩婚化や出産年齢の高齢化といわれる社会ではあるが，できることなら複数の子どもを産み育てたいと望む保護者が多いこともわかる。

子どもの年齢については，2008年，2012年ともに，最も多かったのは１歳であった。次は０歳，続いて３歳となっていた。2012年は，2008年に比べて０歳の利用が５ポイント増えている。全体の４分の１が０歳という現状を思うと，本センターのニーズとしては０歳の利用が増加傾向にあることが推察される。年々，子育て支援施策は拡充し，子育て支援を実施する施設数は増えている。しかし，それらの多くは児童館やキッズランドといった就学前までの子どもを対象としており，０歳の幼い子どもが安心して遊べる居場所の確保にはなっていない。それにも

かかわらず，2歳までの利用ニーズは高まっていることから，需要が供給に追いついていない現状がある。さらに，未就園児を対象とする保育所等が行う子育て支援プログラムは，そのほとんどがイベント型である。決まった時間に集まり，決められたプログラムのみの参加では，参加者間のコミュニケーションは図れない。また，プログラムの終了と同時に施設を後にしなければならず，親子はその後の居場所を失うこととなる。本センターは，金曜日の午前以外は予約なしで利用でき，ノンプログラムである。このことがかえって母親同士や常駐の保育士，教員，学生たちとの自由なコミュニケーションを促す結果となっている。今後の子育て支援を考える際は，本センターのような未就園児が安心して自由にあそべる場所の提供も重要となっているのではないだろうか。

本センターを知った情報源は，2008年と大きな変化はなく，知人による紹介が6割を占める。次に多い媒体は，インターネットによるものである。2008年では，広告やチラシが上位であったことを考えると，情報ネットワークの普及とその活用度は著しい。本センターでも2011年から週に一度インターネットでの情報配信を行っており，この取組みが，本センターを訪れるきっかけとなったのであれば嬉しい。なお，電話での問い合わせに対しても，常駐の保育士がその都度細やかに対応している。いつも同じスタッフが施設内にいることによって，利用する親子に安心感を与え，回を重ねるごとに信頼感へと変わる。この両者の関係性が構築されることにより，利用者はここでの空間を心地よいと感じ，満足度を高める結果になっているのであろう。

本センターを利用する理由で最も多いのは，開設当初から「子どもが遊べる場所がほしかった」である。アンケートの回答者の多くは1歳以下の低年齢児をもつ保護者で，この回答からも，未就園児とその保護者が集う場所不足が示唆される。また，「他の保護者と情報交換」「家から近い」「子どもの遊び相手がほしかった」なども15%以上を占め，地域内での場所・空間・仲間を求めている保護者が多いことが明らかとなった。

本センターの利用頻度と他に利用している施設をみると，本センターの利用者は一カ所のみではなく，地域のさまざまな施設を用途や目的に合わせて上手く組み合わせながら利用していることがわかる。2008年と2012年の利用頻度を比べると，毎日の利用が減り，月に1回～2回の利用が増加している。本センターの近くには，保育所，公園，児童館等があり，施設ごとに種々のイベントが催される。保護者は，その日の子どもの様子や施設の利便性等を考えながら，出掛ける場所を選んでいるのではないだろうか。

本センターへの要望や意見をみていくと，2008年の件数は33件，2012年には14件と減少している。その間，利用者は増加傾向であるということから考えると，本センターの方向性が利用者に理解されたことと推察される。

具体的にみていくと玩具に関する項目では，2008年の要望にあがっていた「玩具を増やしてほしい」「玩具のアルコール消毒はどうなっていますか」などは，現在実践がなされ，改善されている。また，2008年，2012年と共にあがっていた「大型遊具があれば」「大型遊具を時々出し

てほしい」について，本センターでは，0歳から2歳までの小さい子どもも安全に生活しやすいような環境設定を心がけ，それらの設置はしていない。3，4歳の子どもたちに対しては，ウィークリープログラムの中で，マットや跳び箱，平均台を用いてのサーキット遊びなどを取り入れている。

次に，2008年の要望に，「子どもへの遊び方や接し方等のアドバイスがほしい」があがっていたが，常駐の保育士や学生ボランティアにより改善された。2012年には，新たに「おねえさんがもっと遊んでくれたらいいと思う」などの学生との関わりに関する項目があげられた。ウィークリープログラムやスペシャルプログラム等への学生の参加は多いが，いつも行っているデイリープログラムは，学生たちの授業時間と重なり，同プログラムへの参加は，少数であるのが現状である。今後は，情報提供を含めた周知の徹底をし，その一方で，カリキュラムの中に，組み込むことなどを考えたい。

さらに，2008年，2012年共に「開館時間の延長を希望します」「土日も開館してもらえると有難いです」などの時間についての要望があげられている。時間の延長は，本センターの管理体制上困難であるが，土日の開館については，毎年行っている「パパとあそぼう」「パパクッキング」「キッズオープンキャンパス」のようなプログラム展開が必要となってきている。また，土日でも気軽に集える場所の提供も今後の課題である。

また，子育て支援センターということもあり，2008年の調査時では，「預かり保育をしてほしい」「出張保育があれば嬉しい」「年齢別プログラムを作ってほしい」などの保育に関する要望があったが，現在では少なくなった。これもまた，本センターの方向性やプログラム内容を利用者が理解して，利用していることが示唆される。その他に，2008年に「水遊びあそびも出来たら，嬉しいです」の要望は，2012年のウィークリープログラム内で実現した。そして，2008年にあがっていた「絵本の貸し出しを行ってほしい」の要望も，2009年から学生たちが企画・運営する「すくすく絵本ライブラリー」が月2回開催されるようになった。2008年での「子育てに関する情報がほしい」においては，常駐の保育士からはもちろん，市内，区内での子育てに関するチラシを置き，常に適切な情報を提供している。

最後に，2008年，2012年共に多くの要望があったのは行事・イベントに関するものである。2008年には，「外出イベントをしてほしい」「キッズダンスを開催してほしい」「色々な企画・行事があれば」等があがり，2012年には，「子育て講演会があれば，参加したい」「親子ヨガをしてほしい」「すくすくワーキングの回数を増やしてほしい」等があがった。2008年と2012年の内容を比べると2012年の要望の方が，より具体的な要望であり，母親目線，母親のためのイベントや行事を望んでいることがわかる。スペシャルプログラムは，保護者がリフレッシュ，リラックスできるプログラムを提供しようと試みている。この種のプログラムを希望する母親の声が多いということは，母親自身の趣味や活動の拡大，子育てだけが主な時間だけでなく，何か社会とつながっていたいという強い気持ちの表れではないだろうか。柏木（2008）は，母親は，

子どもが離れたあと虚脱状態とならないよう，母としてでも妻としてでもない「個」として生きることを真剣に考えなければならなくなったと述べている。また，原田の言った母親が子育て後の人生への展望がもてないことも，この結果から裏付けられる。母親は単に子育ての悩みだけでなく，それ以外の自らの人生の悩みも少なからず抱えている。社会の中で，母親だけの自分ではなく，社会の中で生きる女性としての在り方や存在意義を母親は模索している。この思いは，現在の女性は特に多いのではないだろうか。母親のライスステージを応援するプログラムや働きかけが，子育て中の母親をサポートしていくには必要不可欠になってくると感じる。

おわりに

5年間の本センターのあゆみや利用状況やアンケート結果をみてきたが，一番に感じたことは，子育て親子，子育て中の母親の支援の在り方について，改めて考えていく必要があるようだ。利用者のニーズを捉え，センター運営していく中で，大切となってくることは，保護者，そして子ども，ひとり一人にあった細やかな対応や支援を行っていくことではないだろうか。本センターのように，常駐の保育士に不安や心配などを話すことができる環境を今後も整えていくことが重要であろう。

また，母親のライフステージの支援も今後必要になってくると今回の調査で感じた。子育て中の母親を，ハード面でもソフト面でもまた，女性としての新たなライフステージの架け橋としてもサポートをしていきたい。そして，これから母親だけでなく，父親のライフステージについても注目したい。

今後は，利用者から得られた自由記述を基に質的分析を実行していく予定である。今後も時代時代に応じた，子育て親子を応援，支援できるようなセンターであってほしいと願っている。

（引用文献）

大林陽子・岡田由香・緒方京・神谷摂子・志村千鶴子・佐久間清美・金尾陽治・高橋弘子（2011）大学を拠点とした子育て支援事業の活動報告と評価　愛知県立大学看護学部紀要 Vol.17　33-39

柏木恵子（2008）子どもが育つ条件－家族心理学から考える　岩波書店

原田正文（2006）子育ての変貌と次世代育成支援　―兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待予防　財団法人名古屋大学出版会　28-33

（参考文献）

石岡由紀・森本玲子（2009）子育て支援の現状と課題　～神戸親和女子大学子育て支援センターの実践から～　神戸親和女子大学児童教育学研究 28号　97-107

石岡由紀・森本玲子（2010）子育て支援の現状と課題Ⅱ　～神戸親和女子大学子育て支援センターの実践から～　神戸親和女子大学児童教育学研究 29号　145-152

今村光章・村井尚子（2005）岐阜県における子育て支援センターの現状と課題 岐阜大学教育学部研究報告 教育実践研究 7　139-155

小島千恵子（2011）望ましい子育て支援活動のあり方の探究　名古屋柳城短期大学 研究紀要 33　107-116

保坂遊・石森真由子・松村万里子・木村昭代・小野真喜子・加藤和子・佐藤万利子・片岡彰（2012）保育者養成校における子育て支援活動の試み－保護者ニーズと学生の学びからのプログラム検討」聖和学園短期大学紀要49　1-17
長山篤子・グラハム里美・山口結香・村山順吉（2009）聖学院みどり幼稚園における子育て支援「わかば」の二年間の活動報告－聖学院大学自動学科子育て支援センター「わかば」の基盤としての省察－　聖学院大学論21　105-121